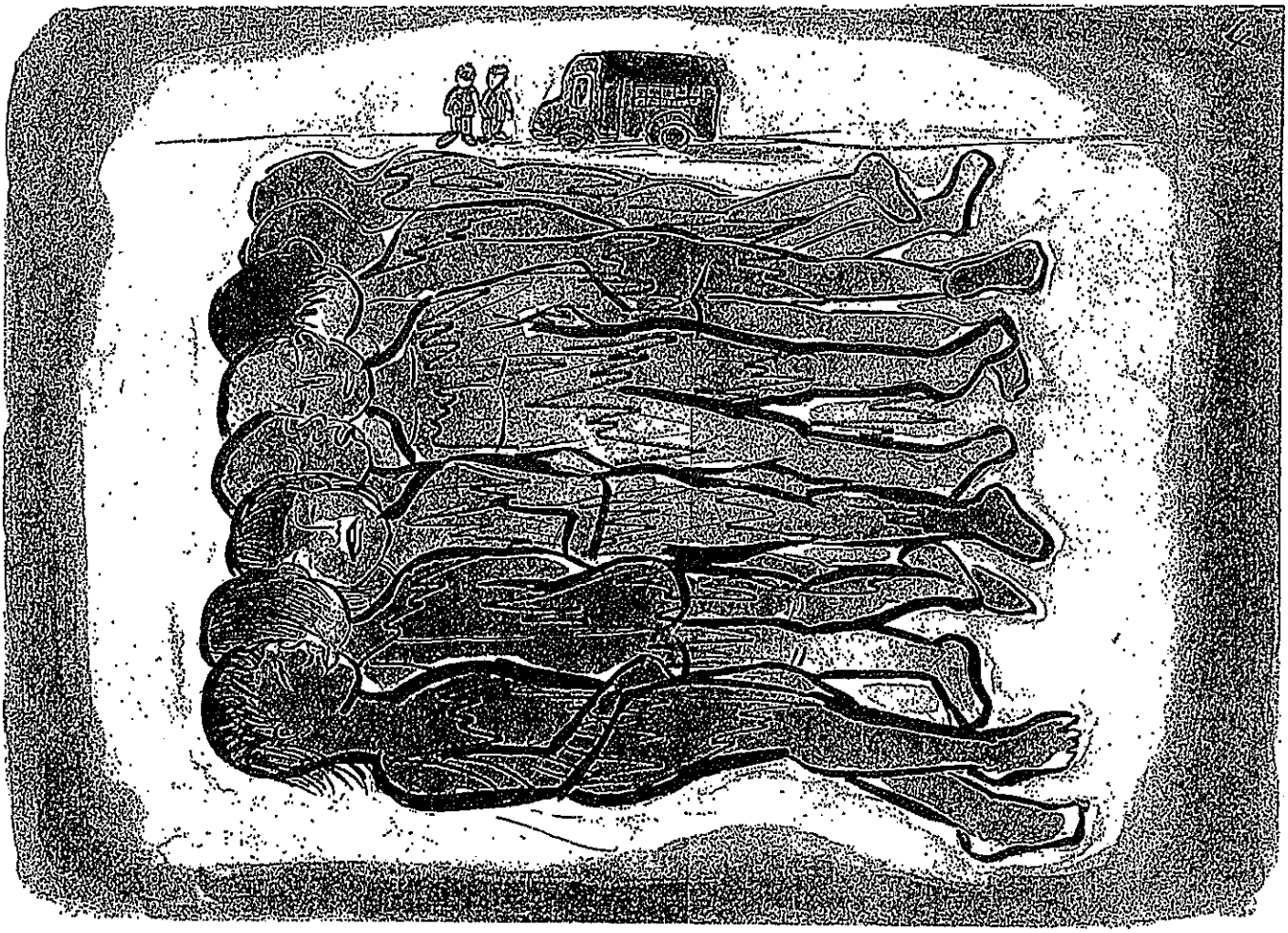


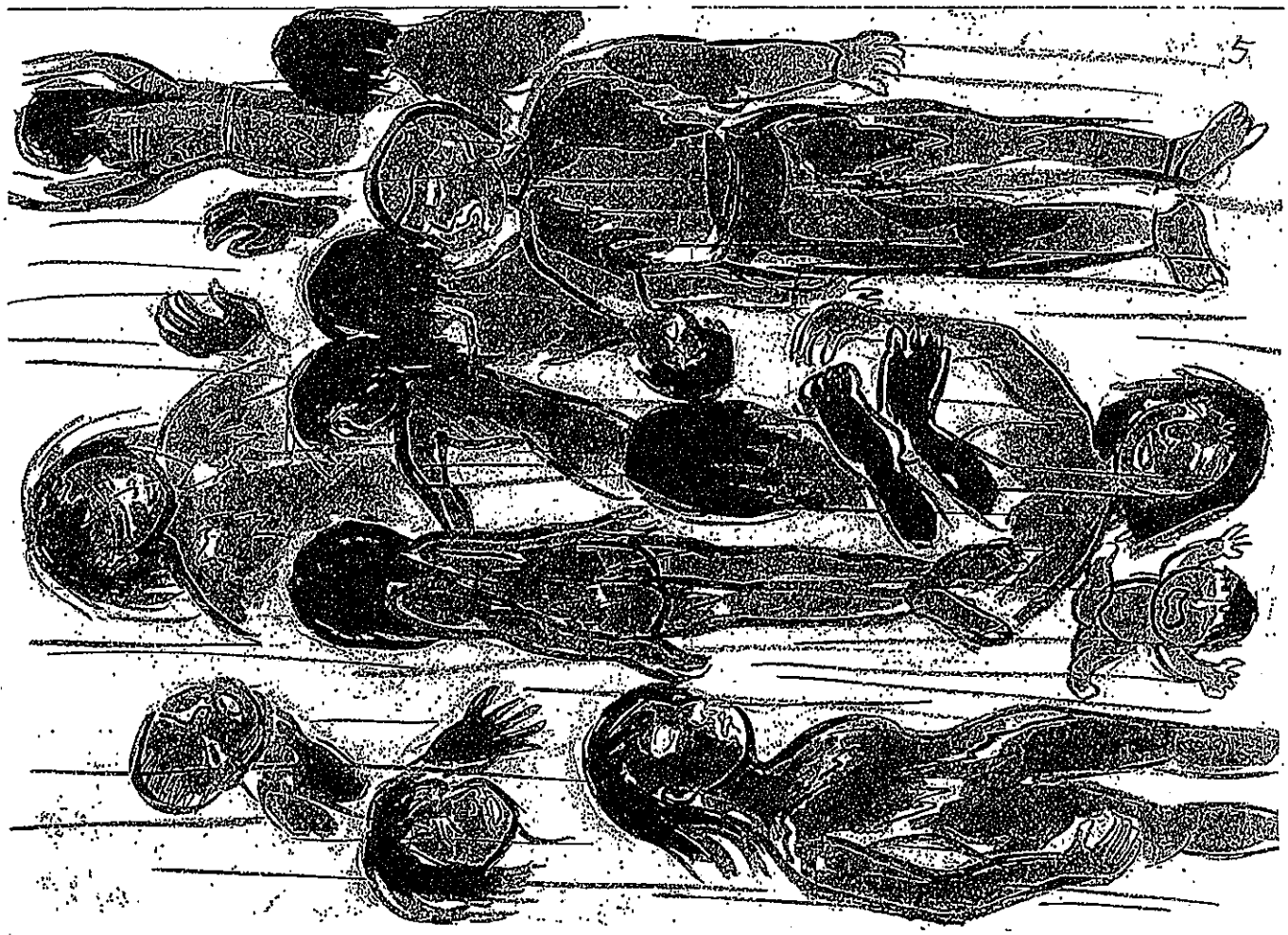
④

死者、負傷者

七日[redacted]さんが見た光景

・道の両側に二〇〇人ぐらい、負傷者がゴリ（魚）を干したように寝かされてあり、道路から軍隊の車がカンパンを投げ与えていた。熱い炎天下のことであり、水一滴出るでなし、この内の何人がカンパンを食うことができたか、実にむごいことであった。一人、二人なら何とかしたいが、どうにもならなかった。

※原爆による死者十四万人。原爆から出た熱線は六〇〇〇度。何もかも焼きつくした。生存者は放射能で被爆し、負傷した。



⑤

死体が浮いて流れる

八日[redacted]さんは、消防隊で横川から八丁堀まで道路の片づけをした。
消防用水の中に、片足を入れたもの、頭を突っ込んだもの、そのまま死んでいた。

川の水が見えないほど多数の死体が浮かび、河口に向けて流れ　ただよっていた。
夏の炎天下と火に追われ、川に入ったのだろう。

⑥

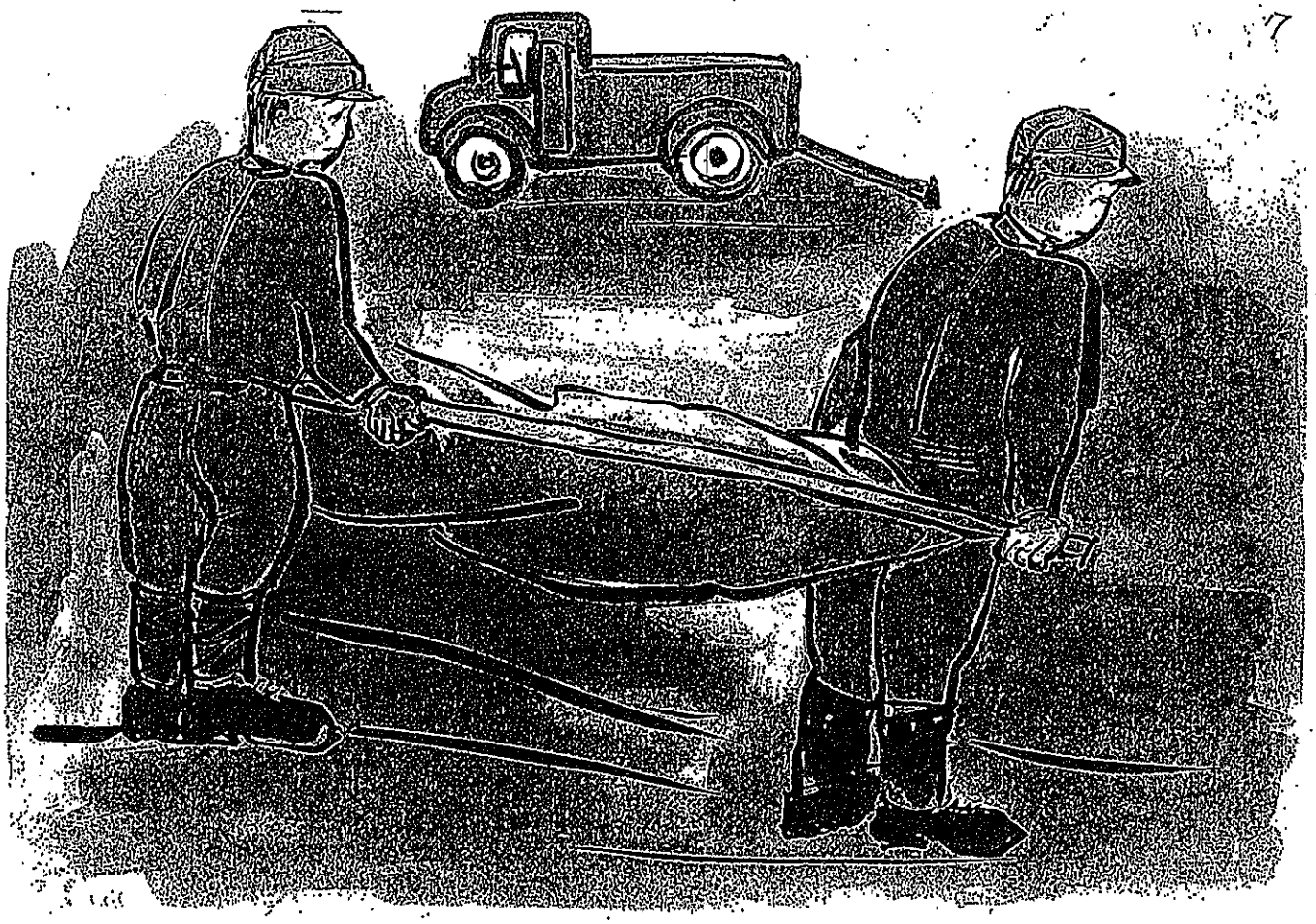
歩いている人

足の立つ患者が二～三人歩いていたが、衣類はボロボロでわかめのようだった。顔は、焼けどで、ふくれあがり、真っ黒でコケの生えた石地蔵そっくりだった。

知人でも見分けがつかないほどである。

両手を少し上げ、ひふがたれさがり　幽霊のように歩いていた。

中にはガラスがいっぱい付き刺さった人もいた。



⑦

患者をトラックへ積み替える

九日、[redacted]さんは可部へ行き、市内から電車で運ばれる患者をトラックへ積み替えた。軍隊の毛布に一人づつ患者を乗せてあり、前後を二人でかかえて積み替えるのである。

患者のウミで毛布がぬれている。よく見ると、首筋や手の奥、衣類の下には、小さい白いウジがゾロゾロはっている。

悪臭が鼻を突く。被爆後二〜三日で生きた人間にウジが湧く。

夏とは言え実に不思議に思えた。

⑧

九日、小河内婦人会の看護

[redacted]…小河内小学校へ多くの人が負傷してこられた。夕方、坂が急なためトラックが登れず、下まで迎えに行き、その翌日から看護へ行った。

包帯の巻きかえ、食事の介助、傷の手当など焼けただれ苦しむ人の世話をした。体に直接布団があたらないよう、やぐらを組んで寝かせてあった。やけただれた人は本当に臭さかった。哀れで痛々しく見るに忍びない有様だった。

小河内婦人会の一員として朝から夕方まで、一週間以上、手伝だった。

・大升秀男…[redacted]さんが山師をされていたのでトラックがあった。二～三日間に何往復もし、一五〇人位収容されたが、その内の一〇〇人は亡くなった。言葉の出ない人は、何処の誰だかわからず記録をとることはできなかった。

[redacted]… 婦人会が交替で看護に努めたが消毒薬もなく、赤チンで血止めをした。どても臭く、ウジがノロノロ這い出す始末で、手がつけられなかった。キューリをすって冷やした。(じゃがいもをすってつけると良かったらしい)

当時はトラックもなかったので、車の指示にしたがって何日も帰らず、従事したとうである。

⑨

火葬

・[redacted]…誰も身寄りの人が来られず、涙が出てしかたがなかった。誰にも見取られず寂しく息を引き取る患者もいた。近くの原野で火葬。哀れで、気の毒でほんとうにいとおしく思い、いつまでも泣いた。

あるおばあさんは半狂乱になり、おじいさんの名を呼び続け、暴れる姿もみられた。

・[redacted]…市内の火葬。

至る所に死人にわらをかけて焼いていた。

無縁仏は三週間も放ってあり、わら灰の上から、青い炎がチョロチョロ昇っていた。雨の日はリンが燃えるのです。

ピカドンほど恐ろしいものはない。

⑩

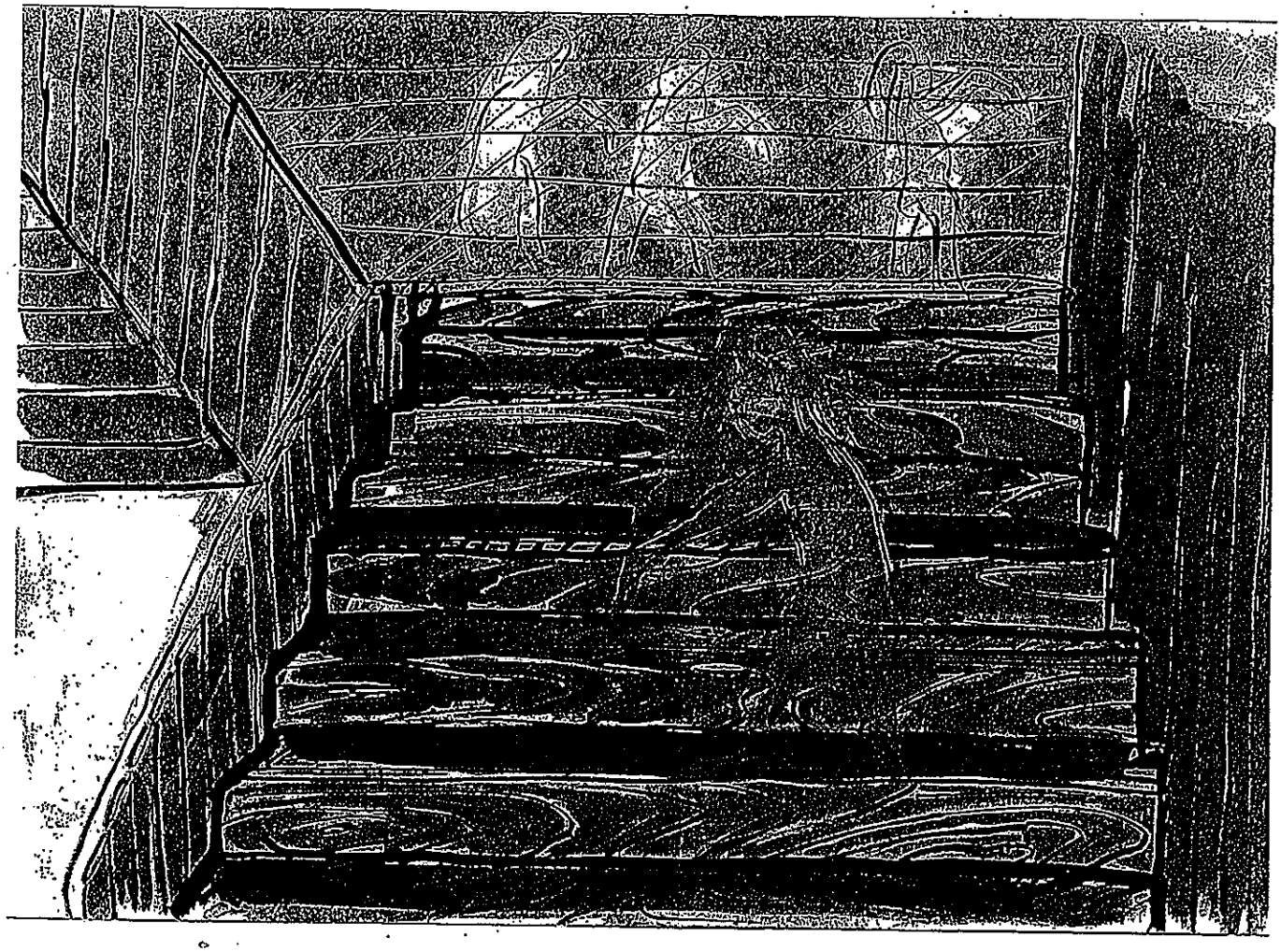
[redacted]ちゃん…[redacted]

[redacted]（[redacted]）さんの末娘　[redacted]ちゃんは十六歳。美人で人懐っこい娘さん。[redacted]へ通われていた。市内の焼け跡から歩いて帰られたようだ。

「お父さん、お母さん。死にとうない」「おばちゃん、わたしは死ぬのかしら、死にとうない」と泣き泣き訴えた。ほんとうにかわいそうで、耐えられなかった。

「[redacted]ちゃん死なないよ。大丈夫、元気を出して」とは言うものの、駄目だと思ってほんとうにわたしは泣いたのです。

わたしは、この原爆で十人も肉親を失った。友人、知人は数しれない。この上三谷（かみみたに）でも、北谷（きたたに）の[redacted]さん一家、広島在住の主人（[redacted]さんの兄）は行方不明、死体も解らない。[redacted]（[redacted]で[redacted]）夫婦は生き別れ。奥さんは行方不明、主人は小河内で亡くなられた。



⑪ 小河内小学校の怪

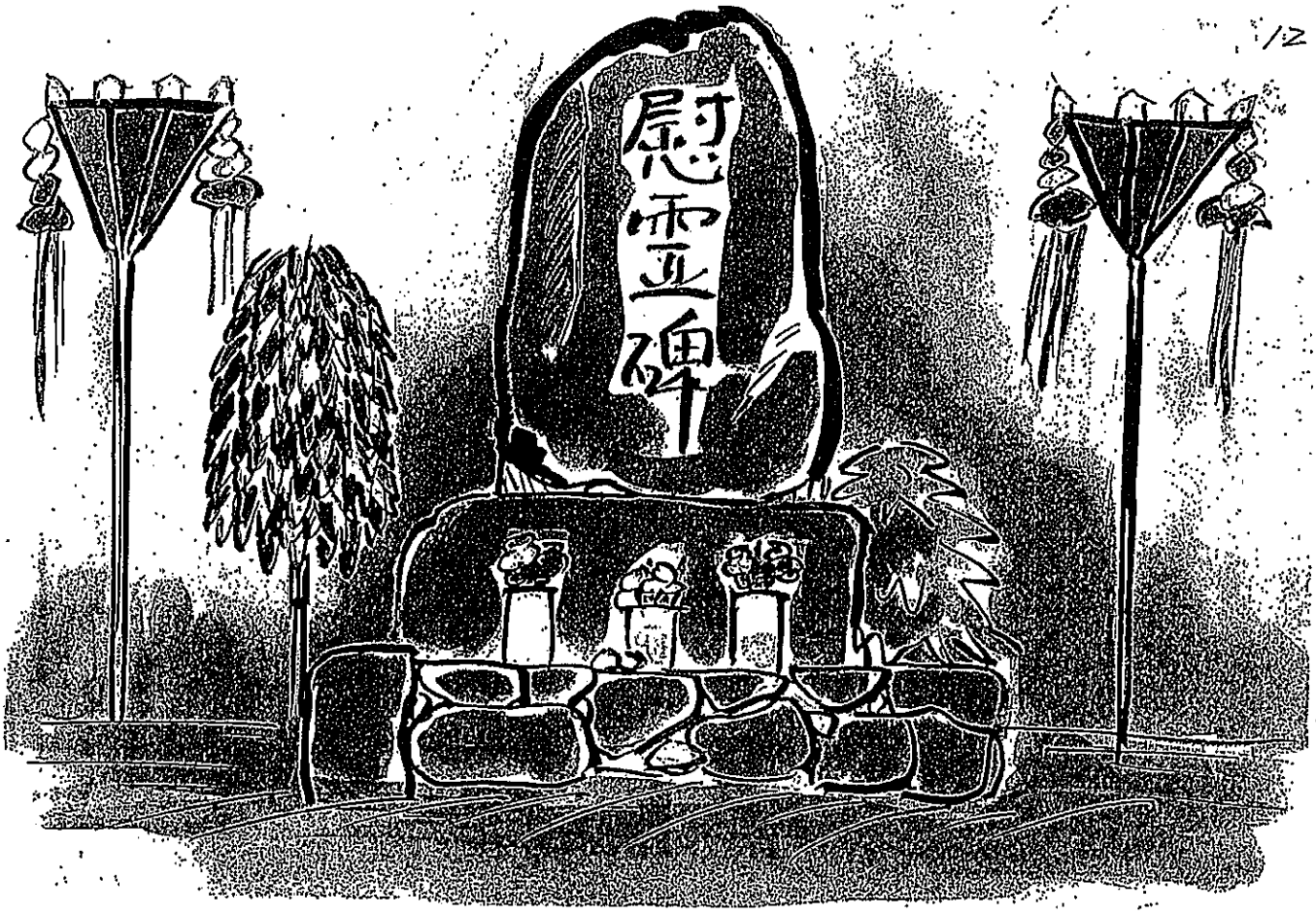
小河内小学校の教室は病室になり、死者、負傷者が運びこまれ、死者は裏山で火葬された。

まだまだこれからと夢や希望を持った人もたくさんいたことでしょう。無念の死を恨んだ人も、嘆き悲しんだ人もいたでしょう。夜、学校の階段を上がると、すすり泣く声、うめき声が聞こえると噂が流れた。

運、不運…[redacted]

原爆の前日（五日）、主人が川崎の編集部隊にいて公用で帰っていたのを、横川まで送って行き、娘とも面会した。楠木町の叔父が泊って行くよう言ったが、その日のうちに帰った。泊っていたらどうなっていたか。

飯室駅で下楓原（しもかえでばら）の[redacted]（[redacted]の実父）、[redacted]（[redacted]の義父）、[redacted]（[redacted]さんの父）に会った。「横川まで車力を取りに行くのよ」と出られた。三人は運よく線路伝いに歩いて帰り、火傷はしていたが九〇～九四歳まで生存された。



⑫

小河内小学校の慰霊祭

八月六日　八時十五分

毎年、小学校裏庭で慰霊祭がとり行われる。

今年は六八回目となる。生徒はこの日のために、みんなで千羽鶴を折りました。

千羽鶴の願い…二歳の時被爆した中学校一年生の佐々木禎子さんは全快の望みを千羽鶴に託して広島赤十字病院の病室で、毎日薬の包み紙で鶴を折り続けました。「千羽になったらきっと病気も良くなるよ」と。千羽を越えても回復することなく一九五五年（昭和三〇年）十月二五日、十二歳の若さで息を引き取ってしまいました。友だちや先生が貞子さんの墓を建てようとしていました。その思いが世界中に広まり「千羽鶴の塔」が建てられた。

子ども達の思いに感動した湯川秀樹博士から鐘と金色の鶴が贈られ中央の内側に吊り下げられている。

日本だけでなく世界中から千羽鶴が現在も届けられている。